
『ハッピーエンドのその後検討会』

梅花空木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ハッピーエンドのその後検討会』

【Nコード】

N5861I

【作者名】

梅花空木

【あらすじ】

絵本作家を目指している季露葉^{いろは} 紅^{くれない}。しかし、紅はハッピーエンドが多い絵本に疑問を抱いていた。そんな彼女が立ち上げたサークルが、『ハッピーエンドのその後検討会』。希望に満ちた紅の高校生活が始まります。

＼ Girl meet Boys ＼

『白雪姫』に、『シンデレラ』、『眠りの森の美女』に、『美女と野獣』…絵本はいつだってハッピーエンドしか教えてくれない。世界は幸せなことばかりではないのに…。

春休みも残り少ないある日。

「…っ…んしょ、もう…ちょいつ…。」自分を励ます様に、呟いて、目的地である学生寮を見据える。

と、その時。ビリッ…ビビ…ドサ…バサッ…。持っていた紙袋が破け、中の絵本が流れ出て、地面に落ちる。

「……。最っ低…。」虚しい気持ちになりながら、絵本を拾っていると、

「…大丈夫？」落ちている何冊かを拾って、差し出してきてくれる人がいた。

「…っ…ありがとうございます…っ。」バツと顔を上げてお礼を言つと、

「いいえ。絵本好きなんですか？」汚れのないかわいい感じの笑顔が眩しかった。

「…っ。」ドキドキと恥ずかしさで言葉が出ない。

「…あつすみません、いきなり。それじゃあ…。」答えたくないのだと思われのか、さつと立ち去ろうとする背中に向かって

「っ…ほんと、に！あ、りがとうござい…ました！」緊張して動こうとしない口を、無理矢理に動かしてお礼を言う。

すると、振り向いたその人がきよとした顔から、ふんわりとした優しい笑顔になった。

「夢を与える職業を目指す人がそんなこと言って良いわけ？」友達には白々しく口を揃えて言われた。それはそうかもしれない。でも

だからと言って、期待ばかりさせて、現実^{くれない}に裏切られた子供たちの気持ちを考えると胸が痛む。事実、紅は現実を知った時、傷ついたのでから。

「よし！おとぎ話のハッピーエンドのその後を検討する会を結成しよう！」言いながら、ぐつと拳に力を込めて勢いよく立ち上がり、クラス全員の視線で我に返る。…授業中だったのだ。

「あつ…スミマセン。」居たたまれなくなり、謝る。

「季露葉…くだらんこと考えとる暇があるなら、廊下に立ってるお！！」沸点に達したらしい先生の絶叫が教室に響いた。

高校生になって初めての授業で、廊下に立たされても紅は動じていない。それより自分で立ち上げる部活のことで頭がいっぱいだった。（後気になることといえば…。）

「あの春休みに会ったあの人は、誰だったんだろう…。制服着てたし、ここの生徒だよね？」瞼を閉じ、その人に語りかける様に呟く。彼の眩しい笑顔は心に焼き付いていた。

「もう、マジおかしいっ！紅なにやっとなの？」ケタケタと笑う前の席の紫杏^{しあん}。紫杏は、寮の部屋も隣同士の高校に入って初めての友達だ。

「や、だって…入学前からずっと考えてたんだもん…。やっぱり小さい子にも現実をわかってもらえるようにしないと…。」ごにょごにょと言いつつ訳をする。

「そうなん？でも授業中は、あかんやろ、おもしろいけどなあ。」紫杏はまだ笑いが抑えられない様子だ。

「へへっ。でも決めたよ！私、部を立ち上げる！！」キツパリと言う。

「へえー、あのハッピーエンドのその後なんかかってやつやる？」本気だったのかと言いたげに紫杏が目を丸くする。

「『ハッピーエンドのその後検討会』！！んー長いから、略称は『

H・E・A・I』でいいかな！」にこりとして見せる。

「おもしろそうやから、うちも入りたいんやけど…うち部活推薦でコ
コ来たから、弓道続けなあかんねん。…堪忍な？」しゅんとする紫
杏。

「あ、そんな気にしないで？3人集めればサークルとして認めてく
れるらしいし…あと2人くらい楽勝っ！」紫杏の手前明るく、簡単
そうに答えたが…不安だった。

ポスターを貼り、ビラ配りをしてもなかなか人は来なかった。紅は
何日も放課後暗くなるまで教室に残っていた。

1週間が経とうとしていたある日のお昼休み。

「季露葉さん？先輩に呼ばれるよー。」クラスメイトの女子に呼
ばれて行くと、男性が立っていた。

「季露葉さん？キミが作ろうとしている部活について聞きたいんだ
けどいい？えっと…屋上でも行こうか。」にこりと微笑むその人は、
紅が春休みに偶然会った先輩だった。

隣を歩きながらもう一度確かめる。

（確かにあの人だ…！）

「…あ、の！」緊張で声が震える。

「ん？」やわらかい笑顔が紅に向けられる。

「春休みの時に絵本を拾うの手伝っていたんで、ありがとうござ
いました。」その笑顔を見ていたら、自然に言いたいことが言えた。

「ああ！あの時の！たくさん絵本持ってた子！？やっぱり絵本好き
なんだね。」驚きを隠せない様子だが、嬉しそうに言う先輩。

「あの…、もしよろしければ、名前とか教えてもらってもいいです
か？」照れながら言う。

「ごめん…そういうえば、忘れてた。僕は、獅稀^{しき} 白斗^{はくと}。2年だよ。
二卵性の双子で、弟もこの高校にいるんだ。」少し慌てた様子の先
輩。

（白斗…白かあ。ぴったりだなあ。）ぼーっとそんなことを考えて
ると、

「季露葉さん大丈夫？」と顔を覗き込まれる。

「…へっ…平気ですっ！」狼狽えながら答える。

「あ、季露葉じゃなくて…紅でいいですよ？」何気なく言うと、

「そう？じゃあ紅さんでいいかな！素敵な名前だね！」と先輩。

先輩に名前を呼ばれて、誉められたことがすごく嬉しかった。

「私実は…絵本作家を目指してるんです。でも絵本ってハッピーエンドのものばかりでしょう？だから少しい現実を反映させたものがあってもいいと思うんです。それで…まずは、ハッピーエンドの後の検討からやってみようかなって…。」真剣に話した。先輩ならわかってくれる様な気がしたのだ。

「うん、確かに。でも、検討しても答えは出ないよね？それはどうする？」先輩は、予想以上に真剣な答えを返してくれた。

「それは…人それぞれでいいと思うんです。ただ集まってこういうのはどう？っていう話し合いが出来れば…。」嬉しくて、ワクワクしながら話を進める。

「そっか、そっか。なら、サークル結成だね！」にっこり満足気に話す先輩。

「え？」状況が掴めない。

「紅さんに、僕に、弟連れてくるよ。それで3人！」先輩がいたずらっぽく笑う。

サークルにはなったが、サークルは部室をもらえないので、紅の教室で活動することになった。

「紅さん、こんにちば。」爽やかに白斗が入ってくる。

「獅稀先輩！こんにちば。」なんだか普通のやり取りなのに、くすぐったい様な気持ちになる。

「あ、この前話した弟なんだけど…バスケ部と兼部だから、水しかこれないんだって。ちなみに、僕も美術部と兼部だから水、木は休むね、ごめん。今度の水に僕が弟連れてくるよ。」すまなそうな顔

で先輩が話す。

「気にしないでください。趣味の延長線みたいな気楽なサークルですので、来られる日に来ていただければいいんですから。」わあわあと言う。

「ありがとう！あ、僕も名前で呼んでるし、紅さんも名前で呼んでいいよ？弟も来たらややこしいでしょ？」何気ない気遣いが嬉しい。「あ……じゃあ白斗先輩……？」もごもごと言う。

「ん、何？」にこにこと白斗。

「よっ呼ぶ練習しただけです！す、すみません。」体中が熱くなつた。

水曜日。放課後、紅が教室にいと廊下から、

「待てよ、しろってば！本当にこんなサークル入ったのか？」というぶっきらぼうな声が聞こえた。

「だって、おもしろそうだよ？ハッピーエンドの後を考えるなんてワクワクしない？」のほほんと答えているのは、白斗のようだ。

「あ……白斗先輩？」ゆっくり扉を開ける。

白斗の横には、目許が涼やかな男性が立っていた。白斗がかわいい系なら、この男はキレイ系だろうか。

「紅さん！あのね、これが話してた弟の黒斗こくとう。無愛想だけど……いい奴だからよろしくやってね。」

「よろしく……」ムスツとして黒斗が言う。第一印象としては付き合いにくそうな人というイメージだ。

「あつ紅です……。よろしくお願いします。」ペコツと軽く会釈をする。

「じゃあごめんね、美術部行くから！」白斗が走り去って行く。

「……。と、取りあえず入って下さい。」教室に招き入れる。

『……。』重い沈黙が続き、黒斗の視線に気づく。

「な、何ですか？」白斗とは別の意味で緊張する。

「1個聞きたいんだけど…」

「何でもどうぞ！」無理矢理笑顔を作る。もちろん、『自己紹介の範囲内』という意味だ。

「あんたさあ、しろのこと狙ってるわけ？」冷めた瞳が一瞬だけ紅に向けられる。

「は？しろ…？」わけがわからない。

「白斗のことだよ！」苛立ったのか、語尾を強める黒斗。

「……っ！！」赤面したのが自分でも分かった。

「…チツ…悪いけど諦めて？」黒斗は、忌々し気に舌打ちをして、さらつと酷いことを言う。

「黒斗先輩には、関係ありませんよね。」負けてたまるかとはわざと刺々しく言う。

「ったく。あるから言っただよ。俺ら寮も同室で、一緒に風呂入って背中流しっこしたり、一緒に寝たりしてるもん！」にやあと笑い、顔を窺ってくる黒斗。

「へっ！？本当！？」驚きすぎて、ついタメ口になってしまった。

「うーそつ。」あっさり言う黒斗。

「なんだあ、冗談かあ！」ほっとしていると、

「なんちゃって…実は…。」と内緒話でもするように声を潜める。

「どっ、どっちなよう？」からかわれるのが癪で、ムッして答える。

「さあてねえ？」意地悪気に黒斗が笑う。

（この人には敵わない。）紅は心底思った。

「乙女心と…」

「…お前も優しい言葉かけられて、しろのこと好きになったんだろ？ぶっ…単細胞。」嘲笑う黒斗。

「…っ！うつさい！どうでもいいでしょ！！？」これ以上弱みを握られたくない。

「図星かぁ！。しろの奴無自覚のたらしだからな。」黒斗がうんうんと頷く。

「あ、だから…白斗先輩を心配して、私を遠ざけようとしたの？」ほんの少しだけ紅の中の黒斗の好感度が上がった。

「いーや？単にお前が邪魔だから！」気持ち良いほどスッパリと言う黒斗。

「……。」

（本当にこいつがああ白斗先輩と双子なの！？ひねくれすぎ！）

「それに、しろ彼女いるし？」黒斗が爆弾発言を付け足しの様に軽く口にする。

「は…？」自分の耳を疑った。

「だ・か・ら！付き合ってたんだよ！分かったか、バーカ！」捲し立てる黒斗。

「…そ…なの？…わかった！またからかってんでしょ？その手には乗らな…。」と言いかけ、

「織羽^{しよくはね} 朱璃^{あかり}。俺らと同級で、美術部員。加えて……。」淡々と事務的に話す黒斗に阻まれる。

何か続けて話している様だが、耳が聞くのを拒否しているのか、内容とは全然わからない。

（なんだろう…心に穴が空いたみたい…。）ただ何もかもが虚ろに思えた。

「黒斗…？終わった？そろそろ帰れる？」ひょこつと白斗が教室の

ドアから顔を出す。

「しろっ！遅かったじゃん！」と黒斗。

「紅さん…弟の相手大変だったでしょう？…あれ、紅さん？」心配そうに紅を見る白斗。

「…え？…あ、白斗先輩…。お疲れ様です。」上手く笑えない。

「なんか元気ないね…。黒斗が何かした？」紅から視線を外し、黒斗を叱るような目を向ける。

「待てよ、しろ！俺は何もしてないぜ？」誤解だと慌てて弁解する黒斗。

「…本当に何でもありません！最近このサークルのことで、張り切りすぎてて、疲れたのかも…。」苦笑いを浮かべる。

「そっか…。あんまり無理しないでね。」微笑む白斗。

「じゃあっ…お開きってことで…。」そそくさとドアを出ようとする黒斗。

「ひとりで寮まで行ける？」白斗が黒斗の腕を引っ張り、紅の方を振り向く。

「ありがとうございます、大丈夫です…。」口元だけの笑みをたたえて言う。白斗たちの方を向いているはずの目は何も写らない。

「すごいな！紅が作ったサークル美形双子が兼部してるって話題になってるで！…アレ？なんかあったん？」紅の顔色が優れないのを見て紫杏が気遣う。

「う…ん。ちょ…っ…。」堪えられなくなった涙が零れる。

「ちゃんと聞くから、話してくれへん？そんで、今晚はウチの部屋に泊まっていったらええよ！」優しく肩に手を置いて安心させる様に笑う紫杏。

紫杏は、紅が泣き止むまでただ黙って側にいて、紅が話し出すまで何も聞かないでいてくれたので紅の心はとても救われたのだった。紅は、双子の獅稀先輩とサークルをやることになった経緯、白斗と

の出会いと、紅が片想いしていたこと、しかし彼には彼女がいることなどをぼつりぼつりと話した。紫杏は頷いたりするものの、基本的に口を挟まず聞いてくれた。

「そっか。つらかったな…。でもいくらかスツキリしたんとちゃう？」紫杏が泣き腫らした紅の顔を覗き込む。

「…ん。ありがと。」確かに心は少し軽くなっていた。

金曜日。この曜日は、白斗とふたりきりのサークルの日だ。紅の気持ちも2日たったので、なんとか落ち着いた…様に思っていた。

「こんにちは、紅さん。」白斗が教室にやってきた。

「あ、白斗先輩…こんにちは。」しかしまだ顔を合わせるのは気まずい。

「一昨日は大丈夫だった？」おそらく心配して聞いてくれているのだろうが、紅には嫌なことまで思い出させる。

「……。」紅が答えられないでいると、

「あ、ごめんね。答えたくないならいいんだ…。」慌てる白斗。

「それよりさ！今度黒斗のバスケの試合観に行かない？あいつ人付き合いは悪いけど…バスケは、けっこう上手いんだよ！日曜なんだけど、どうかな？」白斗がワクワクとした様子で聞いてくる。

「え？…私行つていいんですか？」なんだかデートに誘われてるみたいで嬉しかった。

「もちろん！紅さんには笑顔が似合うから、早く元気になってほしいんだ。」にこにここと白斗が言う。

女の子皆に対して優しいとわかっていても、ドキドキしてしまう。

「具体的な活動は今日が初めてですよ。今日は、『白雪姫』について検討したいと思います。」言いながら、『白雪姫』の絵本を出す。

「7人の小人が出てくる話だね。確か最後は王子と白雪姫、小人たちで暮らすような感じになるんだっけ？」パラパラと絵本を捲り

ながら白斗が言う。

「はい。そこで終わりです。」こくりと頷く。

「じゃあ…毒林檎を作った魔女がまた邪魔をしにくるんじゃないかな。紅さんはどう思う？」白斗が難しい顔をする。

「んーと、そうですね。お城ならまだしも小人たちの家で暮らすとなると…いくら小人でも7人もいたら、ちよつと気まずくないですか？ほら、ふたりきりになりたい時だって、絶対あるはずですし。」自分で言うておいて、本当に夢が無いなと思った。白斗に受け入れられるか少し不安になる。

「確かに。…そうだ！じゃあ折衷案で、お城にセコム付けて、ふたりに住めばいいんじゃない？」目をキラキラと輝かせ、白斗が言う。
「…ぷっ…セコムって…でも確かにそうですね。現実を反映させるならそれがいい…かも…。」おかしくて笑いが納まらない。久しぶりに笑い、心が暖まる。

「じゃあ決まり！思った以上に、楽しいね、コレ！」白斗が満足気に笑う。

日曜。近くのアリーナに9時に待ち合わせだ。昨日からそわそわして落ち着かない。

「変じゃない？この服。」服選びに協力してもらった紫杏に聞く。

「むっちゃかわええで？」笑顔の紫杏。紅が元気になったので、紫杏も嬉しかったのだ。

アリーナに着くと、白斗はもう来ていた。隣に女性がいる。

「あ、紅さーん！おはよー！」白斗が手を振ってくる。

嫌な予感がしたが、ここで逃げる訳にはいけない。

「白斗先輩っ…あの、おはようございます…。」白斗にあいさつするが、その女性が気になる。

「こちら…えつと…」と白斗が照れて言葉に詰まり、

「はじめまして。織羽 朱璃と申します。」と朱璃が言う。

（綺麗な人…。）皮肉ではなく、心からそう思った。

「あ…っ、い…季露葉　紅ですっ。」　なんだか緊張してしまう。

「あぁっあなたが黒斗が気にかけてるっていう紅さん？　よろしくね。」

「笑うとえくぼができて、幼い印象になる朱璃。」

「…よろしく願います。」

（気にかけてるっていうか…見張られてるだけなんですけど。）　それはさすがに言えなかった。

席は白斗、朱璃、紅と座り、ふたりは楽しそうに話していて、とても紅の入る雰囲気ではなかった。

（デートに誘われたみたいに浮かれてバカみたい。そうだね、彼女いるなら…当然彼女も呼ぶよね…。）　すごく惨めな気持ちになった。

「黒斗、頑張つてねー！」　白斗がコート内の黒斗に言うと、

「かつこいいとこ見せてね！」　と朱璃もエールを送る。

「ったく…バカツプルめ。また来たんか。…ん？」　とぼそつと悪態をつき、紅が来ていることに気づいて、

「おーい！　その単細胞！」　紅に声をかける黒斗。

「誰が、単細胞だつて！？」　手すりに手をかけて反論する。

「お前のことだよ！　自覚ねえの？　今から俺様の大活躍見せてやっから、瞬きしないで観てろ！！」　黒斗がふふんと不敵に笑う。

「そんなの無理に決まってるでしょ！　このバカ！」　叫んで気分が少し紛れたので、悔しいが黒斗に感謝する。

『ハッピーエンドのその後検討会』～表と裏？～

（へー、本当に上手いじゃん。）ど素人の紅にも分かるほど、黒斗は、自分で豪語した通りに、バスケの試合で大活躍をした。

試合後。観客や選手たちもアリーナを後にする。

「しつろー！俺勝ったよお！！」白斗に褒めてもらいたいのか、ユニホームのまま黒斗が駆け寄ってきて、観客席を見上げる。

「……って、しろいねーじゃん！」途端に態度が悪くなる黒斗。つまりは、いつも通りだ。

「……………」緩慢な動作で、空いてる横の座席を見つめる。涙が零れそうになった。その時、

「お前なあ、何メソメソしてんの？」めんどくさそうに黒斗が言う。

「め、……メソメソなんてしてない！！」キツと黒斗を睨む。

「ふーん。ま、どうでもいいけど？……それよりコートに下りてこいよ。」とん、とんとドリブルをしながら黒斗が言う。

「なんでよ？私はもう帰りたいの！」「今日は何もしたくない。

「いいから、こい！」「切れ長の目が鋭く紅を射抜く。

「……っ。」黒斗に気圧^{けお}され、渋々コートに下りる。

「コレ。ここからあのゴールに入れてみる。」先ほどのボールを紅に手渡し、ゴールを指差す黒斗。

「ちょ……ちよつと待ってよ！あ、あたしバスケなんて、ほとんどやったことないし、第一ここ、3Pシュートの線じゃない！！アンタはは簡単に入れてたけどっ……！」慌てて抗議する。

「簡単なんかじゃない。」黒斗がボソツつと呟く。

「……え……？」きょんとする紅を他所に、

「いいか？……力まず、ゴールをしっかりと狙って打つんだ。」黒斗は紅の背後から紅の手を自分の手で包む様に指導をする。

（たくつ…横暴なやつ…）

しかし、黒斗が普段とは反対に真剣な態度だったので、口に出せない。

ボールは高く弧を描き、ゴールへと吸い込まれる。

「やった！」「我知らず口に出す。

「今のは、ほぼ俺が打ったようなもんだけどな。」「紅の呟きを聞き逃さなかった黒斗が釘を刺すかの様に言い、見下す様に笑う。

「うつ…うるさいなあ。」「正論だが、悔しい。

「いつもひとりで残って練習してんの？」「コートから出て、なんとなく疑問に思ったことを聞く。

「…そ。」「練習の手を止めず、そっけない返事をする黒斗。しかし、返事は期待していなかったので少し驚く。

「へー…。」

不意に白斗先輩と彼女のことが頭を過ぎる。体育座りをして、うつ向く。

「あゝ…つんとに面倒くせー女だなあ！！」「焦れたそうにドカドカと紅に近寄ってくる黒斗。

「んなつ…！？」「言い返そうとして立ち上がったが、言葉が見つからない。

「他人を妬んだり、自分はダメだとか思ってる暇があるなら前を見るー！」「黒斗が、ビシッと指を差し、紅を見据える。

「…っ。」「わだかま蟠っていたものが無くなり、心が軽くなるのを感じた。（私は朱璃さんとは違う。私は私らしく頑張ればいいんだ。）

アリーナのから帰り道。

「コレ、明日行こうぜ。」「当たり前のように黒斗が出したのは、遊園地のチケットだった。

「は！？意味わかんない、何でアンタと一緒に遊園地行かなきゃのよ！」黒斗と行く理由がない。

「俺の勝利祝い！！」愚問だと言わんばかりの黒斗。

「それで…なんであたしなのよ…。」ふうと溜め息をつきながら問う。真剣に会話するのが、バカらしく思えた。

「俺、彼女いねーし。男同士で遊園地つてのもなあ…。」黒斗がうーんと考え込む。微妙に会話が噛み合っていない。

「ま、どうせお前も暇なんだし…いいだろ？」皮肉を込め、ニヤツと嫌な笑みを浮かべる黒斗。

（こいつ…最つつ低！）

それでも黒斗の言葉に元気づけられたのも事実なので、気分転換も兼ねて、行くことを了解した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5861i/>

『ハッピーエンドのその後検討会』

2010年10月9日05時12分発行